

山での奇妙な体験

2010 年 7 月 22 日

久家 隆男

私は一人で数馬から三頭山に登った。当時は周遊道路がなく、数馬は東京の秘境と言われ、今と違って登山者は少なかった。山頂から奥多摩湖側に下ったが、尾根の末端で道が分からなくなり、適当に下ると沢に出た。流れは緩やかで、左岸は部分的に開けていた。沢沿いに踏跡が見えたので安心し、水辺に向かって腰を下ろした。水音だけが響く静かな所だ。

しばらくして背後に視線を感じた。人混みの中で誰かが自分を見ているときに視線を感じることもあるが、こんな所に人がいるはずがない。念のために振り返ったが、無論誰もいない。気のせいかと思い直し、休憩を続けた。その内に一層強く視線を感じるようになった。もう一度振り返り、辺りを見回した。すると、木立の奥に朽ちた小屋があることに気づいた。正面の出入口らしき所には筵が掛かっている中は見えない。どうやら視線の源はこころしい。

急に背筋が寒くなってきた。急いでザックを背負い、二度と振り返えずに急ぎ足で下った。

以上は私の約 50 年前の実体験です。

山では時々奇妙なことが起きるようです。山のベテランや山小屋の人などが体験した話がしばしば「山と溪谷」に載ります。最近「黒い遭難碑 安曇潤平著」という本を読みました。ただ、これは大部分が創作のように思えます。強いて教訓を見い出せば、独りでテントを張るときには張り場所に気を付けることや、慰霊碑の傍にあまり立ち寄らないことでしょうか。

このような話しは猛暑の折にクーラーの電力節減になるでしょう。